

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)
 大学院生研究
 2005 年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院			文学研究科	地理学専攻
指導教員	所属・職名		氏名		
	文学部史学科・教授		豊田 由貴夫 印		
自然・人文の別	自然	人文	個人・共同の別	個人	共同名
研究課題名	同時代的状況と不安、疑念、オカルト信仰のダイナミクス — インド社会の邪視信仰の現況				
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	文学研究科・地理学専攻 ・博士後期課程2年		小松原 秀信 印		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	同上		同上		
研究期間	2005 年度				
研究経費	200 千円				

研究の概要 (200~300 字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、インド社会において近年リバイバル傾向にあるといわれるオカルト信仰の現況について、文化人類学的視座から把握することを目的とする。とくに 1991 年に経済自由化への道を歩み始めて以来、「他性の危機」を伴う同時代性の大きな波を受けて劇的な変貌を遂げているインド社会に醸成する不安、疑念の増幅と、不幸・災害生起の超能力信仰である邪視の再活性化とのダイナミクスについての理解が目指される。邪視の今日的な状況を考察する本研究は、現代インド社会に生きる個々人の他者に対する関係のあり方やイメージに接近し、同時代世界に生きるわれわれ自身が抱える諸問題の究明にも連なるものである。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[同時代的状況] [邪視] [他者イメージ]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

今日のインド社会が直面する社会変容は目に見ることのできる表面的な変化以上に、個々人を取り巻く社会・文化的環境、そして生活空間の質に関わる著しい変化をも引き起こしている。たとえば、都市部では外資系企業の参入が相次ぎ、ミドル・クラスが急速に成長してきている。しかし、そのようなミドル・クラスの生活と低所得者層の生活とは極端なコントラストを描いており、大規模な整備計画によって均質空間化された都市の縁辺ではスラムが急速に拡大し、路上生活者も増大している。同時代的に進行する画一化のイデオロギーの進展は、皮肉にも、「勝ち組」と「負け組」のコントラストを一層明確に露呈してしまうこととなっている。

この変化は都市部だけに限ったものではなく、その周囲の村落社会を巻き込んだ巨大な渦となっている。もともと村落社会と都市部とは隔絶して存在しているのではなく、密接なつながりをもっていたが、そのつながりの拡大は 1990 年代に入ってからより強力に両者を結び付けている。すでに経済自由化以前から村落生活者は伝統的職業のみでは生活できなくなってきていたが、経済自由化以降はこの傾向に一層拍車がかかり、生活の糧を求めて都市部に出稼ぎにでたり、移り住んだりするといったことが日常化してきている。しかし、総じて経済状況が悪化する中で、一部の隣人が急速に富を手にするのを目の当たりにして、村落から都市に出て富を築こうとする人々の多くが、現実には都市で稼ぎを得ることは困難であり、そのまま都市の縁辺のスラムの中で生活するか、再び村落へ戻って、肩身の狭い思いをしながら生きていくこととなる。

こうしたインド社会の変容は、個々人を結び付けていた紐帯であり、また個人をやわらかく包み込んでいたカーストやジャーティなどの「中間集団」の解体を引き起こす。社会的相互扶助を伴うジャーティ内の個々人の結びつきは、「現代性」を特徴付ける個人志向性にとって代わられつつある。これは、オジェ [2002] が指摘する現代世界を特徴付ける三つの過剰の一つ、「個の過剰」(かつて何らかの集団が担っていたコスモロジーが個人レベルに定位される) が露わとなるような状況がインド社会でも認められるということでもあるだろう。「個の過剰」が生起する状況下では、個人は他者との柔軟な関係性を持ってない(「他性の危機」) がゆえに、自らの「単独性」が剥き出しとなるような不安を抱えることとなる。個は孤独と対峙しなければならない。世界各地で頻発している外国人排斥、レイシズム、アイデンティティ欲求に伴うカルト崇拜といった諸現象は、この「他性の危機」によって引き起こされているともいえる。

インド社会において具体的な胎動となって現れているのは、次々と誕生する新興カルトの存在やインド系移民を通じて世界的展開を見せ始めているヴァストゥー・ヴィディヤ(古代インドの建築書とその知識)のリバイバル現象である [*International Herald Tribune* (June 11, 2005)]。これら一連の現象に特徴的なのは、商業主義と密接な結びつきにあるということである。一種の「パッケージ化」としても捉えられる宗教実践の商業化は、「伝統的民俗知」からの脱文脈化であると同時に、現代性・グローバル的状况への再文脈化でもある。これは、Comaroff 夫妻の研究において示されている「妖術」の特徴とも相同する (cf. オカルト経済)。Comaroff 夫妻流の解釈をするならば、インド社会におけるヴァストゥー・ヴィディヤのリバイバル傾向とは、アフリカ社会における「妖術」のリバイバル化とも対応する同時代的現象として捉えうるものであろう。

このようなインド社会の変容によって、人々の間に邪視へのそこはかたない不安が醸成されているという点を指摘することができる。農村部では、かつての伝統的職業から脱却し、新たなビジネスチャンスや雇用の機会を得た人間にとって、もっとも懸念すべきは非成功者(「負け組」)の妬みであり、それが邪視の恐れを助長している。また、このような状況は、農村部に限定されたものではなく、都市部においても邪視の恐れが醸成されているといえる。ただし、都市部の人々、とくにミドル・クラスが恒常的かつ積極的に邪視の存在を肯定しているわけではない。彼らは、自分たちが高等教育を受け、都市的な生活をしていることを誇りにもしており、邪視などは村落部に住む人間たちだけの関心事であると考えている者もいる。しかし、彼らの社会的・経済的成功とは、現代的な不確実性(資本主義システム、投機的ビジネス・チャンス)を内包したものであるもので、度々失敗や不幸にも

研究成果の概要 つづき

直面する。そして一度不幸に直面すると、彼らはそれが何者かの邪視によって引き起こされたのではないかというオカルト的想像力を禁じえないのである。

また興味深いのは、都市部のミドル・クラスの邪視おとしについての考え方である。彼らは、邪視をおとすには都市にある寺院ではなく、日頃から邪視おとしを行っている村落部のオジャー(witch doctor)による治療が効果的であるのだと考えている。そのため、都市部からバイクや車で村落部に邪視おとしにくる人々が年々増加している。たとえば、U.P.州 B 村に住むアゴール・バーバーのもとには、村落部の人々よりも(B 村の村人からは強欲であると評されているため)、現在では都市部のミドル・クラスがセッセと訪れており、このように度々都市部の人間が B 村までくるようになったのは、ここ数年のことであるという。

人類学上では、村落部と都市部とは隔絶して存在しているのではなく、密接なつながりをもっているという見解が一般的になっている。ただし、それはあくまで分析上の話であって、人々(特に都市部)のイメージの中では都市対農村という二項対立的図式が連綿と保持されている。この二項対立的な認識枠組みが、「古臭い」邪視おとしのためには、都市の寺院よりも村落のオジャーの方が効果的であるのだという認識を生み出しているのである。

参考文献

Comaroff, Jean and John L. Comaroff

1999 "Occult economy and the violence of abstraction: notes from the South African postcolony", in *American Ethnologist*, 26(2): pp.279-303.

Comaroff, Jean and John L. Comaroff (eds)

1993 *Modernity and its Malcontents: Ritual and Power in Postcolonial Africa*, Chicago: Univ. of Chicago Press.

2001 *Millennial Capitalism and the Culture of Neoliberalism*, Durham: Duke Univ. Press.

Geschiere, P.

1988 Sorcery and the State: popular modes of action among the Maka of Southeast Cameroon, *Critique of Anthropology*, 8(1): pp.35-63.

1997 *The Modernity of Witchcraft: Politics and the Occult in Postcolonial Africa*, Charlottesville: Univ. Press of Virginia, (orig. *Sorcellerie et politique en Afrique*, 1995).

オジェ、M.

2002 『同時代世界の人類学』(森山工訳)、藤原書店。

関根 康正

2004 「都市のヘテロトポロジー—南インド・チェンナイ(マドラス)市の歩道空間から」、『〈都市的なるもの〉の現在—文化人類学的考察』、東京大学出版会、pp.472-512。

参考資料

International Herald Tribune (June 11,2005) published by THE NEW YORK TIMES.